

Richard Pomfret,  
*Asian Economies in Transition: Reforming Centrally Planned Economies.*

Cheltenham: Edward Elgar Publishing,  
1996, xiv+155 pp.

にしき み こう じ  
錦見浩司

本書はアジア諸国の市場経済化過程をコンパクトにまとめた概説書である。対象となっている国は中国、ベトナム、ラオス、カンボジア、モンゴル、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、アゼルバイジャンの11カ国にのぼる。これらの国は、計画経済の経験年数や改革開始時期に多少の差はあるものの、いずれも市場システムの導入・確立という共通の課題に取り組む移行経済である。しかし、現状では改革の成果は国ごとに異なり、経済成長の実績にも大きな差が生じている。中国やベトナムの改革・開放政策が順調な実績をあげる一方で、モンゴルや中央アジア・コーカサス諸国は、1991年のソ連崩壊以降、急激で継続的な生産縮小と激しいインフレに見舞われている。これまでのところ、市場経済化は必ずしも人々に豊かな生活をもたらしているとはいえない。

アジア諸国にみられる多様な移行過程を国際比較し、その全体像をできるだけ統一的な視点から簡潔に描き出そうというのが本書の主な目的である。まず最も華々しい成功を収めている中国について、1978年以降における一連の改革・開放路線の展開を企業改革と価格自由化政策（第2章）、対外開放と直接投資の誘致（第3章）および金融改革（第4章）という観点から整理する。その上で、これをベンチマークとして他のアジア諸国の改革内容や実績の評価を試みている（第5章～第8章）。さらに、移行過程に関連する話題として、CIS諸国における通貨選択と豆満江開発プロジェクトについて解説が加えられている（第9章、第10章）。

さて移行経済の国際比較では、本書全体を通じる

一貫した視点として、(1)農場や企業経営への利潤動機の導入と(2)価格自由化の進み具合の2点が、共通のチェックポイントになっている。いうまでもなく、この2つは競争市場が効率的な資源配分機能をきちんと発揮するために最低限必要な条件であり、実際の移行過程においても改革推進の両輪の役割を担っている。利潤動機の導入は通常、農場・企業の私有化と契約制度の改革（生産責任制の導入やソフト・バジェットの撤廃など）という形で実施されるため、それぞれについて検討する必要がある。一方、価格自由化の過程において著者が最も重視するのは、外貨の価格（為替レート）と金融資本の価格（利子率）である。いずれの価格も、市場に政府が介入しやすく、その歪みの影響が経済の隅々にまで波及しやすいという特性があるためである。そこで、(1)外貨の闇市場がないことと(2)実質利子率が正であることが、移行過程の健全さを最もよく表す指標になると主張される。この基準によれば、対象11カ国のうち中国とインドシナ3国は比較的良好な移行過程にあると判断される。またモンゴル、カザフスタン、キルギスタンは改革に若干の遅れが目立つが、順当な経路上にある。これに対し、アゼルバイジャン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタンの4カ国は健全な移行過程から外れており、今後いくつかの点で政策変更が必要になると診断されている。

移行経済に関する近年の出版物は枚挙にいとまがないが、その多くは特定国の移行過程に関する分析か、あるいは東欧諸国のビッグ・バン型改革と中国の漸進的改革との比較分析である。本書のようにアジア諸国の移行過程を統一的に議論しようという試みは珍しい。アジア諸国の多様な移行過程を統一的に描き出す「移行経済のアジア・モデル」は果たして存在するのか。まことに興味深い問題である。ただし、本書の力点はあくまで各国の現状をとらえることにあり、本格的な理論・統計分析は行われていない。その点では、この分野の専門家にはいくぶん物足りないかもしれない。これから「アジア・モデル」の探索に踏み出そうという方々に「現地の略地図」としてお薦めしたい一冊である。

(アジア経済研究所総合研究部)